

第		22		回						
住	民	の	自	治	・	統	治	研	究	会
	ご		あ		ん		な		い	

## 文献講読(その3)-仁平典宏著-「ボランティア」の誕生と終焉

＜贈与のパラドックス＞の知識社会学-第Ⅲ(名古屋大学出版会)

と き:2013年11月16日(土)午後1時30分～4時(台風のため延期)

ところ:大阪自治体問題研究所会議室

本書は、「ボランティアとは何か、どういう価値があるか」について、「これまで人々は何を語ってきたか」、に注目します。第Ⅲ部、第7章ボランティア論の自己効用論的転回～終章〈贈与〉の居場所、までを講読します。

前回 2013.9.7 研究会の報告

文献講読(その2) - 仁平典宏著-「ボランティア」の誕生と終焉(贈与のパラドックス)の知識社会学-佃(序章)・第Ⅱ部、山田早苗(第5章)、岡野(第6章) 報告

### 1) 序章 「ボランティア」をめぐる語りと〈贈与のパラドックス〉—問題設定と方法

(1) 「ボランティアとは何か、どういう価値があるか」について、「これまで人々は何を語ってきたか」、に注目する。ボランティアに関するメタ(高次な、超、言語を記述する言語=メタ言語)的分析。①いかなる政治的・社会的文脈で行われ、どういう帰結につながっているか。②ボランティアの言説において繰り返し現れるパターン(意味論形式)を抽出する。

(2) 〈贈与〉は、被贈与者や社会から何かを奪う形(贈与の一撃)で反対贈与を獲得していると観察される。〈贈与〉が〈反贈与〉となる、この意味論形式を本書では〈贈与のパラドックス〉と呼ぶ。

### 2) 第5章 「慰問の兄ちゃん姉ちゃん」たちの《1968》—大阪ボランティア協会とソーシャルアクション

(1)1960年代、ボランティアという言葉の導入が活動をどのように変えていったかを、大阪ボランティア協会と関連施設訪問グループを取り上げて検討。

(2)1960年代後半、極めて戦後的な意味論(=ボランティアの〈贈与のパラドックス〉を、〈運動〉となることによって解決する)が、実際にボランティアの活動者によって生きられた時期。1970年代の住民運動、障害者運動と接続。

(3)ボランティアという記号の位置値とその含意についての2点の整理。①政治的カテゴリーとしての曖昧さ、②ボランティアは政治と混じり合いつつ、「楽しさ」という意味も封殺されていなかった。

### 3) 第6章 國士と市民の邂逅—右派の創った参加型市民社会の成立と変容

(1)〈贈与のパラドックス〉は、全ての人に共有されていたわけではなく、民主主義を積極的に擁護する立場においてのみ有意味だったが、戦時中の滅私奉公の意味論を保持した末次一郎は、これと異なる〈贈与〉をめぐる戦後を生きた。末次⇒日本健青会という自発的アソシエーションの中心人物、「社会的右派」と呼ばれ、一方で、海外青年協力隊、青年奉仕協会などの制度創設に大きな役割を果たした。国のために尽くす「奉仕」の意味論に依拠するもの。

(2)「國士」と「市民」との出会いの含意について⇒①活動の自律性を何より重視し、既存の国家の在り方を批判する者。②民主化要件①(国家に対する社会の自律)は、戦争への反省からスタートした政治的左派のみならず、右派にとっても支持されうる。民主化要件①は、形を変えながら維持され続け、ネオリベリズムが現勢化する2000年代にはむしろ上昇していく。

当研究会は自主研究会ですので、参加者には資料代1回=500円の負担の協力をお願いしています。

主催=住民の自治・統治研究会(06-6354-7220)